

インテルのトップコーチが語る
よい選手の見方、考え方

【ベースボールマガジン社】発行月刊誌サッカークリニック
2001年4月号掲載記事
天野泰男著

2000年11月30日から12月8日まで第5回イタリア指導者研修を行った。今回は初めてミラノを訪れインテルのトップチーム練習見学、トップチームコーチによる講演会が行われた。また、インテルの下部組織の試合と宿泊施設を備えた練習場の見学もでき、少年育成に情熱をかける一面を見た。場所を南に移してローマではASローマのトップチームの練習を見学した。中田、トッティなどスター選手がそろうチームの雰囲気を感じることができた。今回は、この中からインテルのフィジカルコーチのステファノー・ドッタピオ氏とヘッドコーチのジャンニーニ・ルッカ氏の講演からイタリアトップチームの練習コンセプトや少年育成についてとインテルの下部組織について報告する。

今シーズンのインテルは開幕前のカップ戦等の不調もあり第1戦のレッジーナ戦で敗れた責任をとりリッピ監督を解任。21歳以下のヨーロッパ選手権優勝、オリンピックでベスト8に入った功績のある代表監督マルコ・タルデリ氏を急遽監督に迎えた。その後インテルはピエリ、ピルロ、サモラーノ、ブラン、セードルフ、レコバなど(注目のロナウドはフランスでリハビリ中)スター選手を抱えながらも連勝とは行かず苦しいリーグ戦が続いたが、翌日に大一番、ホームミラノでのユベントス戦を控えた大切なときにわれわれにイタリアサッカーについて語ってくれた。

ステファノー・ドッタピオ氏(Stefano D'ottavio)とジャンニーニ・ルッカ氏(Luca Giannini)

ステファノー氏はイタリアサッカー協会少年育成部の責任者。日本に来日し各地で講習会を開いた経験をもつ。ジャンニーニ氏はピサのコーチなどを経てイタリアユース年代の育成に貢献。戦術を担当するコーチとして活躍。両コーチともイタリア代表チームのユース年代監督マルコ・タルデリ氏とともに21歳以下のヨーロッパ選手権で優勝し、シドニーオリンピックチームのスタッフを務めた。タルデリ氏がインテル監督に就任したことにともない2人が彼をサポートしている。

1. シドニーオリンピック

イタリア代表(U-21)はヨーロッパ選手権(U-21)で優勝したがそのときは、選手のコンディションがよく「とても乗っていた」状況だった。大会に備えての準備もしっかり行われ非常にうまくいった大会だった。これに対してシドニーオリンピックは問題が多かった。まず、オリンピックチームはヨーロッパ選手権に参加した選手とそれ以外の選手とを混合して編成した。普通、セリエAの各クラブは開幕に備えて2ヶ月の準備を行うものだが、オリンピックの準備にはたった10日間しかなかった。また、シドニーに移動するには大変時間がかかる上、時差のこと、気候の違いなど現地に対応するのにも時間がかかった。開幕ゲームは地元オーストラリアということで一番ハードな試合となった。なんとか1-0で切り抜けたが、結果ははじめから見えていたものだった。一次リーグの第2戦と、第3戦は現地にも慣れ比較的内容も良くなったと思う。スペイン戦は相手のことも知っていたが、彼らもわれわれのことを良く知っていた。とにかくステファノーが体力面の管理を行ったが、シドニーオリンピックでは完璧といえるものではなかったということだ。

シドニーオリンピックでは3-4-1-2のシステムで戦った。このシステムは選手の特徴を考慮して決めたものである。攻撃の起点になるピルロには、ほかの選手にはないファンタジア(単にテクニク的にうまいだけでなく観衆を驚かせる意外なプレー)をもっている。試合というものはいつも2つ

のチームのシステムがぶつかり合うのだが、試合をしてはじめてわかることも少なくない。逆にいくら試合前に分析を行ってもいざそのチームと試合をしてその分析がいかに正しくなかったか知ることもあるだろう。ピルロには相手チームには読めないパス、ドリブルを行う。イタリアでは厳しいプレッシャーやハードなぶつかり合いが行われているが、イタリア人は彼のようなファンタジスタを求めているし、育てなくてはならないと考えている。

2. サッカー選手の見方

サッカー選手が良い選手か、そうでないかを見る場合二つに分けて考えなくてはならない。ひとつはその選手の技術面。もうひとつはアイデア面。技術面はサッカーのプレーを正確にすばやく行うといったところを注目する。これができないと良いサッカーはできない。しかし、いくらこれらができていたとしても試合の中での発揮の仕方がまずければチームに貢献していることにはならない。局面に応じてどんな技術を発揮するかといったアイデアが豊かでないといけない。代表チームやトッププロのチームでは選手を集めるときには技術を中心にみるが、集めてからはアイデア、つまり頭の中身を見ることになる。ピルロはその点ほかの選手に比べて大変頭の良い選手である。普通の選手が見ないようなところを見て、相手に気づかれないようにパスを出す。ジャンニーニは以前イタリアのユースのチームとともに日本にきて試合をしたことがあるが、日本の選手は技術はあるがファンタジアがないような印象を受けた。ジャンニーニがピサで教えているとき、多くの無名のしかし将来有望な若手の選手を集めた。その中には、サッカーを楽しめずにプレーする選手もいた。ファンタジアは「楽しみ」という中から生まれると思う。

3. フィジカルとサッカー

1970年代、サッカーは技術重視だった。60-70%が技術、15-20%が戦術、10-15%が体力という感じだった。しかし、1990年代は違う。20%が技術、30-40%が戦術、30-40%が体力になっている。つまり、体力面がかなり重要視されているということである。これは、医学の発達と大きく関係していることだが、スポーツにおける体力の研究も進化した。これらの傾向は2000年代に入っても続いていくだろう。しかし、サッカーにおいて体力が技術よりも優先されるということはあまり良い傾向ではない。サッカーは見ている、またプレーしても楽しいと感じることが必要ではないか。少年たちはサッカーを楽しんで技術が向上していく。そして、若い人に携わるコーチも楽しんでサッカーを教えなるといけない。昔のイタリア人はヨーロッパの中では体格的に恵まれていないのに、強い体とパワーでプレーするアングロサクソン系のサッカーを目指した。我われはこれから多くのファンタジスタを育てて昔を取り返したい。

4. インテルでのコンディション管理

インテルに限らず、セリエ A のチームは選手のコンディション維持に苦勞する。強豪チームのほとんどは週に2回大切な試合がある。一つは週末に行われるセリエ A の試合。もう一つは週の中日に行われるヨーロッパチャンピオンズリーグや UEFA カップなどのカップ戦である。どちらもチームにとって大切なので試合に100%のよいコンディションに持っていかなくてはならない。試合の次の日は大抵筋肉をリラックスさせる内容となる。約2kmを軽く走るだけとか、1kmを7~8分かけてゆっくり走ってストレッチングとマッサージなどというものである。インテルの場合28人の選手を抱えているがた

例えば 13 人が試合に出場したとするとその選手とそれ以外の選手では翌日のコンディションは全く違って来る。それでも、すべての選手が試合のときに 100% になっていなくてはならない。火曜日の練習は戦術的なものも必要になるが、15-20 メートルのダッシュなどスピード系を行う。これらフィジカルトレーニングの内容はいつも戦術の練習とリンクしながら担当のコーチや監督と話をしながら進めている。

5. インテルの少年育成

インテルは少年育成にも力を入れている。イタリア国内にインテルの下部組織を配置し優秀な選手を育てるとともにスカウト活動を行っている。ミラノ市内にある練習場は敷地内に宿泊施設などを備えている。優秀な選手は遠くからここに集まり、住み込みで練習に参加する。ここには教師が出向いて勉強を教え学校に通わなくても教育が受けられるようにしている。選手が帰省する交通費などはもちろん、生活に関する費用や教育に関する費用はすべてインテルが支払っている。ここではサッカーに集中できる環境がすべてそろっている。

ちょうど私たちが訪れたときにはインテルとアタランタの試合が行われていた。年代は 1988 年に生まれた選手のチーム(11歳-12歳)、と 1987 年に生まれた選手のチーム(12歳-13歳)の 2 試合だった。雨にもかかわらず両チームの保護者は熱心にグラウンドを囲いセリエ A の試合と同じように大きな声で声援を送っていた。余談になるが、イタリアでは驚くべきことに少年の試合では副審は何もしない。何もしないというのは大げさであるが、やっていることといえばタッチライン上に立っていること、旗を持っていること、ボールがラインから出ると旗を少し動かすことだけで、オフサイドも見ない。そのかわり、主審は走り回っている。副審がオフサイドを見ないのだから、主審が見なければならずこれは相当体力と審判技術が必要である。まわりの保護者はそれでも容赦なく「オフサイド！」とか「ファウル」とか文句をいうのだから、審判も鍛えられるというものだ。以前「イタリアの少年の試合ではオフサイドとかのトラブルはないのか」と聞いたことがあるが、そのときの返事はこうだった。「もちろんトラブルはあるさ。でも判定はすべて主審が決めることなんだ。それに対して文句は言えないからね」

試合の内容だが両チーム戦術的に優れ、また選手の技術もしっかりしておりグラウンドコンディションが悪かったのにもかかわらず面白いものだった。この年代あたりから日本の子供より発育は早くなり、何人か大きな選手がいる。特に GK はとても背が高いのが特徴。イタリアのどのチームにも言えることだが、勝負に対する執念はこの年代でも恐ろしく強く、反則を受けても文句一ついわず黙々とプレーしていた。

6. おわりに

今回は世界トップレベルのプロチームの現場とコーチの話を聞くことができた。これまでは少年サッカーという側面からイタリアを見てきたが、今回はまた違った方向からのぞいた。インテルの練習は別に変った練習ではなく、シュートやゲームが中心だった。半面で行った 11 対 11 の 1 タッチのゲームは恐ろしいくらい正確でスピードに満ちていた。ピエリはシュート練習でシュートを打ったあとテレビで見せるようなガッツポーズをみせ大喜び。次はポストに入る順番なのに忘れてしまい、みんなに「喜んでないで、ポストには入れよ！」といわれて頭を掻きながらあわてて駆け戻る光景は、

まさしく「サッカーを楽しまなければならない」というジャンニーニの話とオーバーラップする。

大切なユベントス戦は 2 点を先制されタルデリ監督のあせりが伝わってくる。ユベントスのジダン、デルピエーロ、ダービッツが面白いようにパスを通しインテルを翻弄する。しかし、ミニゲームでディビ・アッジョが見せた豪快なシュートが、この試合でもフリーキックで同点シュートとして見事に決まった。インテルはようやくドローに持ち込み、7 万 5 千人の観衆とともに行われたサッカーショーは、試合後怒りのユベントスファンによる警官隊との衝突で幕を下ろした。